
魔法少女リリカルなのはStrikerS～違う未来の世界線～

ピスタチオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikeS（違う未来の世界線）

【Nコード】

N7236V

【作者名】

ピスタチオ

【あらすじ】

この街の大きな屋敷に住まう一家があった。

その一家は古より畏れられ、妖怪屋敷と恐れられる屋敷があった。

その一家名を「芦原」。

葦原家の一人息子「芦原優太」。

この一人の男が成すこの世界の物語の始まり…。

第01話「はじまり」（前書き）

ここは「魔法少女リリカルなのはSS」のもうひとつの世界のお話。
この世界にはたくさん未来がある。

そのたくさん未来がある世界。ひとつひとつの世界は未来が決ま
っている。でも隣の世界は未来が違う。または結果は同じだけど、
過程が違ったりする。そんなたくさん世界線のひとつのお話・・・。

ここでは作者の好きなように作り上げられ、色々な展開が起きたり
します。

作者はまだまだ未熟故何卒暖かく見守っていただきたいと思います。

第01話「はじまり」

「…暑い」

第一声がこんなのでいいのかとおもうが、心の底からこの言葉しか出ない。

俺、あしはらゆうた芦原優太はこの町に住むごくごく平凡な普通の大学1年生である。特になにかが秀でてるって訳でもない。

ただ、言えることは俺は人間ではない。いや、性格には3/4人間ではある。だが、もう1/4はちがっている。それは俺の祖父である「ぬらりひょん」という妖怪の血が1/4ながれているからだ。そういうと普通の人間ではないといわれるかもしれない。

だが俺は妖怪の血なんてどうでもいい。

俺は普通の人間でありたい。

家の決めたことなんて知らない。俺は俺の人生を歩んでいきたいんだ。

でも最近、よくこんなことを思う。

「なんか面白いことでも起きないかな」

普通の人から見れば、「妖怪の血が1/4はいつてる」ってだけで十分そうなんだろうけど、実際に生まれた時から「1/4妖怪」なんだからみんなが持っている感覚とやら変わりはしない。

てか1/4なんてそんな気にならない。

「こんな暑いかなんで学校なんか行かないといけないんだ…」人間でありたいと思っても、学校がだるいのは一緒なのである。

「せっかくの夏休みなのに三者面談で進路の相談か…」

ふと後ろを振り向く。

「あれ…?」

アイツがいない。

俺は少しあたりを探してみた。

しかし、アイツはいない…。

「あの野朗…。またどっかで無銭飲食でもしてんじゃねえだろうな」
アイツというのは俺の祖父のこと。妖怪である「ぬらりひょん」のことだ。

「とりあえず携帯に電話してみっか」
ピッ

妖怪が携帯もってるのかって？

こんな時代だ、持ってもおかしくはないだろう？

俺の祖父もかれこれ3千年くらい生きてるらしいけど…。

というか、家の妖怪連中は普通にみんな携帯電話もってるしな。

「ん？どっかで着信音なってるな」

辺りを見る

ぬ「なんじゃ、電話などしてきよって」

「なんじゃ、じゃねえよ！いつのまにいらなくなったんだよ！今日は三者面談って言うてんだろ！？」

ぬ「わーっとるわい。だから面倒なのにここまで一緒に来てやったんじゃろうが」

「一緒にいていねえじゃねえかよ！」

ぬ「はあり、まだまだじゃのう…。てめえの後ろにいるわい」
「…！？」

後ろを振り向く。

確かに今は誰もいない。そう、今日に見えている光景には…。

「また明鏡止水か…。なんで今使ってるのか説明してもらおうか？」
ピッ

とりあえず通話料が勿体ないので電話を切る。

ここに祖父がいるのだから電話する意味はない。

見えないけど…

ユラ…

「で、今回はどこに無銭飲食しにいったんだ、このクソジジイ？」

ぬ「そ、そんなことしておらんわい…」

コイツしらばっくれてやがる…。

確たる証拠を突き出してやろうか？

「この顔についてる飯粒はなんだ？」

ぬ「！？そ、それは今朝食った飯がじゃな」

「ウソつけ！あんた今日の朝飯くってなかったじゃねえか！」

ぬ「ぐぬぬ…」

「ったく、いいか、面談終わるまでウロチョロするな、いいな？」

こう釘を刺しておかないと、ジジイはすぐにいなくなる

ぬ「ふっ、ワシの明鏡止水も見破れんのに偉そうに」

黙れ

「『いつかあんたを超える』とか言って欲しいのか？残念だな、俺は妖怪家業を継ぐ気はない」

俺は普通の人間でいたいんだ。

ぬ「お前は継ぐ運命じゃ、この運命だけには逆らえまい」

「言ってる…」

俺たちは学校に行くために歩き出した。早くしないと時間に間に合わない。

今更だが、コイツと先生、俺の3人で将来の進路についてなんて話せるのだろうか…。

―面談室―

先「芦原くんは、とても成績優秀です、いずれ社会の先頭にたつことのできる子だと思います」

ぬ「コイツは会社なんてところには行きはしませんや、先生。コイツは家を継いでもらわにゃなんのですよ」

「な！？」

こいつ、俺が家のこと黙ってるのしってて言ってるのか！？

先「はあ？お家はなにかされていらしたのですか？」

なんかやばい気がする…

ぬ「ん？優太は何も言っていないのですかい？」

おい、てめえそれ以上しゃべんなよ…？

先「はい、なにも聞いてはいませんが・・・どのようなことをなさっているのですか？」

ぬ「ようk…ムグ!？」

「あはは、何言ってるんですかねこのクソジジイは。アハハ…」

大丈夫だよな?最後まで聞かれてないよね?

先「?？」

セーフだ、セーフであってくれ!

「すこし黙っててくれ!(ボソ)」

「先生、俺は先生のおっしゃるとおり一流の企業に就職したいと考えています!」

ウソではない、本気だ。

親父の話なんて聞いたら「へんなやつ」だと思われるでしょう。

先「おお、そうですか。ならよかったです」

ぬ「ようかi…ゴバ!？」

とりあえず口にスリッパをつつこんどいた。

「じゃ、じゃあ先生俺たちこれから大事な用があるのでこれでいいでしょうか？」

先「ええ、大丈夫です。このまま頑張ってください」

「ありがとうございます!」

なんとか乗り切った…。

ぬ「お前、本気で2代目継ぐ気はないのか？」

そんなもの継ぐわけがない。

「たりめーだ」

その言葉を最後にジジイはどこかへきえた。どうせまた無銭飲食でもしにいったのだろう。

そんなこと、俺にとってはどうでもいい。

「はあ、なんか面白いこと起きないかな…」

第1話完

第01話「はじまり」（後書き）

はい、変なところで第1話終わってしまいましたけど…。

とにかく話を書くのがどのくらい大変なのかを実感するために短めにしてみました。かなり難しいです。台詞だけになってしまつて説明が抜けたりなどでかなり高難易度です！

ちなみにまだなのは達が登場していませんが、恐らく3話あたりで本格的にヒロインとして登場することになると思います。

なのは「ええー！次回も出番ないの！？」

フェイト「次回もでられないんだ…」

！？お、おやなのはさんとフェイトさんじゃないですか…

な&フ「こんにちはー！」

こんにちは…。（これ書いてるの夜なんでこんばんはなんですけどね…

次回の第2話終盤で登場する予定になっているので楽しみにしてください！

な「おお、そうなんだ！よかった♪」

フ「でも終盤ってことは台詞あるのかな…？」

そ、それはまあ、いま話構成中なのでなんとも…

まあ尺もないですし（？）

次回予告です！

魔法少女リリカルなのはStrikerS（違う未来の世界線）第2話

作者待望のなのは&フェイト登場予定！

そして主人公優太の人生が大きく動きます。ご期待してください！

な「終わり…？」

はい、そうですが？

フ「短いね…、しかも作者が私達のこと待ってるって」

なのはとフェイトは命より大事ですから！
な「どうも…」

フ「その、ありがとう…」

てことで今回はこの辺で！

次回お会いしましょう。さようなら～！

な&フ「またねー！」

第02話「解放」(前書き)

作「さて、前回のあらすじ…。特にない！」

な&フ「ええーっ!？」

フ「す、少しは何かないの？」

作「ないね、俺は過去を振り返らない！」

な「なんかかつこいいこと言ってる気がするけどなんだかなあ…」

フ「うん…」

作「まあ、まだしっかり土台できてないから前回のあらすじとかまともにいえないのが事実なんだけどね！」

な&フ「あ、納得」

作「では、第2話」

な&フ「スタート♪」

第02話「解放」

「では午前の練習はこれまで！各自昼食を食べ、午後からは校内ラ
ンキング戦だ」

『はいっ』

（やっと休憩か…。この暑さの中での部活は死ぬ）

？「優太、メシ食おうぜ！」

優「ああ、どこで食うよ」

？「そうだな、学食はメンドイし…。弁当でも買って食うか？」

優「あいよ」

コイツは俺の友にして悪友の「獅子廻麻ししのめ 弘隆ひろたか」だ。小学校の頃か
らずと同じ中学、高校に通ってほとんど毎日つるんでいる。

先生「おい、芦原。昼食食べたら校内戦の前にちよっと組まないか
？」

優「了解っす、先生」

先「では、昼食が終わったらな」

優「ウィッス」

部員1「お、芦原と先生が組むらしいぜ、相手誰だろうな」

部員2「さあな、でも楽しみだぜ」

優「そういや、俺たちってテニス初めて何年になるんだろうな」

弘隆「おお？なんだ優太、テニスに飽きたのか？」

優「ちげえーよバアカ」

ただ、どのくらいやってるのか気になったただけだ。たしか小学校の
ときには既にラケットを持っていたんだよな。

弘隆「そうさな」。お前はまだ誕生日きてないからまだ18歳だか
ら15年か？俺は19だから16年だな」

優「もうそんなに経つのか・・・。」

なんともう15年も経っていたのだ。

俺達は同じ日にテニスを始めて今までこうやって一緒にテニスをや

ってきている。

ああ、なんて人間らしいんだ！素晴らしい！

優「ってことは、3歳のときからやってんのか。随分経ったのな」

弘隆「おまえ、ジジイクサイぞ」

優「ハイハイ」

こんな会話をしながらあつという間に休憩時間が終わった。

先生「芦原、俺たちの相手は獅子廻麻と鈴木だ」

優「！？」

弘隆と鈴木：だと！？

鈴木将也。俺と弘隆が唯一このテニス部で危険だと認識している人物だ。

弘隆「おい、俺が鈴木と組むのか…？」

優「らしいな、気をつけるよ。天パー」

弘隆「天パー言うなっ！」

コイツは天パーなのである。

弘隆「しかし、先生の命令だしな。なにより優太と対戦できるんだ、やるに決まってる」

コイツは余程俺と戦いたいらしい。

別におれは自分で自分が強いとは思わないんだがな…。

部員1「ザ・ベストオブワンセットマッチ獅子廻麻サービスプレイ」

弘隆「いくぜえ、優太！」

優「あいよ」

先「芦原、任せたぞ」

優「ウィッス（先生、あんたも働いてくれよ…？）」

鈴木「ブツブツ…」

何故か知らんが吹奏楽部とか色んな部がみにきてる。

俺としてはまあ、目立ちたくないので見られたくない。

てか、正直にいうと来るなって感じである。

部員1「ゲームアンドセット、マッチウォンバイ芦原&木戸（先生）ペア！」

弘隆「くっそ、また優太に負けた」

先「芦原は本当に強いな。しかし、獅子廻麻もまた一段と強くなつてたじゃないか」

弘隆「アザーッス！」

なんだかなあ…。

結果は俺と先生の勝ち。しかし相手が天パーと鈴木だけに正直キツかった。

鈴木…。

そうだ、鈴木。アイツ、試合中俺にかなり殺気だってたな。

弘隆「優太、鈴木のこと気づいてたか？」

優「ん、あ、ああ。まあ一応な」

認めたくないが、コレでも妖怪のヤクザ組の組長の孫で1／4妖怪だからな…。認めたくないけど。

優「第一、何故俺がそんなに殺気立たれなきゃいかんのかわからん…」

弘隆「さあな。でも気をつけろよ？あいつ最近ヤバイ噂が多いんだよ」

優「ヤバイ噂？」

弘隆「ああ、実はな—」

—部活帰り—

優「ああ、結局こんな時間までコートに残ってたな…」

今は午後21時半、部活帰りである。あれから校内ランキング戦が開催され、俺は弘隆とペアを組み優勝した。それから色々と先生の話があり、弘隆と遊んでいま家に向って歩いてる最中だ。

優「はあ、めんどくせ」

いつも同じことの繰り返し。少しでもいいからなにか変わってほしいと願う。

でも、そんなことそう簡単に起きるはずがない。分かっていることだ。

家に帰ったらジジイが「お前はこの組の3代目だ、自覚を持て」とか毎晩のようにうるさいし、妖怪共も毎晩騒いでうるさいし…。

優「俺って、もしかしてかなり不幸なのか…？」
この世に生まれて何も自分の思うようにいかないで人生を決められ、そしていずれ死ぬ。

どうせ死ぬならいま死んでも別にかまわない。

優「なんて言ったらジジイだけじゃなく弘隆にも殴られるだろうな」
アイツは、なんだかんだで俺のことをかなり心配してくれて大事に思っていてくれている。

言葉にしなくてもわかる。それは俺たちが本当の友達だから。

優「そういう意味じゃ、俺は幸せ者なのかもな」

この言葉を最後にもう考えるのがめんどくなったので考えるのを辞めた。

―家―

優「ただいまあ」

？「若あー、おかえりなさいませ♪」

優「ああ、ただいま氷麗」

コイツは及川氷麗。おいかわつらら可愛らしい俺と同じ歳くらいの女の子だ。雪女
だけ…。

この家では3代目ならないけどの俺の側近をしている。

氷「こんな時間までお疲れ様です。先にお風呂になさいますか？それともご飯になさいますか？」

優「そうだな、汗も結構掻いてるし、風呂にするよ」

氷「わかりました。ではご飯の支度をしておりますので、おあがりになったらきてください」

優「わかった」

結構汗かいたし、先に風呂にはいっておくべきだな。

氷「お着替えの支度は、青にさせますので」

優「いいよ、どうせラケットを部屋にもっていくから」

氷「わかりました♪」

普通の女の子（人間）だったら、これ以上嬉しいことはないけど、雪女だからな…。

何も期待はしてない。

そして俺は風呂に入り、飯をくってジジイのどうでもいい話を流してもう寝ようとしているところだ。

優「（欠伸）、寝るかな」

時計をみたらもう深夜12時の30分前だ。明日は部活もなく、特に用事もないからゆっくりしよう。

優「おやすみ」

なんとなく毎晩つぶやくこの台詞。誰もいないのにな。

そして俺は部屋の明かりを消して眠りについた。

チツチツチツチツチ…

優「うん…」

チツチツチツチツチ

優「ん、何か目が覚めたな…」

何時だ…。と思い時計を見るとまだ1時である。

優「目を瞑っておくか」

チツチツチツチツチ…

優「眠れないな…」

どうすれば眠れるか考えていたとの時。

ドクン

優「くっ…」

なんだ、なんか変な感じがする…。

優「外…か？」

ガラガラ

扉をあけて縁側にでた。

優「ここじゃ、ないな」

なんだ、この変な感じは…。

目を瞑る。感覚を研ぎ澄ましてどの方向かさぐってみる。

優「この方角、それに大体の位置…」

学校!？」

優「行って…みるか」

その言葉を発した時にはすでに、俺は家の門を潜って外を走っていた。

近づくにつれ、だんだん「変な感じ」が「嫌な感じ」に変わっていく。

そして、学校についた…はずだった。

優「なんだ、これ…」

へんなドーム状のものが学校を覆っている。何人か通行人が通っているが、誰も気にしていない。

いや、違う。見えていないのだ。

そして俺自身には見えている。だが、見えているだけだ。入れない。体が、意識がその場を認識しようとしなない。

恐らく、他の人は認識していないのだ。ここには何も無いと思わされているのだ。

優「結界・・・的なものか？」

くそっ、入れない。

認識させないだけじゃなく、入ることもできない。

優「気が進まないが、久々に解放するか…」

解放。それは解き放つこと。俺の言う解放は、妖怪の力のこと。

もう何年も力を使っていない。俺が人間でありたいから。

だが、人間ではこの中に入ることが出来ない。なら、やるしかない。

優「妖力解放」

ドクン

体の底から力がわきあがってくるのがわかる…。

優「この姿も久しぶりだな」

そして俺は結界に手をかざす。

そして俺は中に入った…。

このとき俺はわかっていたのかもしれない。

この中に入ることの意味。入ってしまったら何かが変わってしまうこと。

もしかしたら死ぬかもしれないこと。

優「だが、それは俺が望んでいること」

だが、それ以上に：

今の生活が変わってほしいと思う。

そして結界内にはいった。

中にはとてつもなく殺気をはなつ、気味の悪い生物がいた…。

そしてそれに対峙するように…

?? 「レイジングハート！」

(All right, my master)

?? 「行くよ、バルディッシュ」

(Yes, sir)

変な機械のような物を手にした二人の美しい少女が空に浮かんでいた。

第2話完

第02話「解放」(後書き)

さあ第2話いかがでしたか。

な「本当に少ししか出番なかったね…」

フ「うん…。もう少し期待してたのに」

まあ前回のあとがきでも言ったように3話で本格的にヒロインとして登場するから、次回から頑張ってもらおうよ！

な「ちゃんと登場させてね？」

大丈夫、もう3話書き始めてるけど、既に2人の台詞は結構あるよ。

フ「そうなんだ、やっと本編にも名前がでるんだね」

な「そういえば今回名前でてないよね…」

フ「うん、レイジングハートとバルディッシュだけ…」

な&フ「デバイスより後に紹介されるヒロインって…グス」

ちよ、泣かないで！俺が酷いみたいじゃない！？

な「そのまんまでしょ…」

フ「うん…」

ま、そうなんだけど…

そ、そんなことより次回予告です！

な&フ「そんなこと！？」

フ「酷いよ、やっぱり…」

ほらそこ、いじけないの！

では次回ですが、とうとうなのはとフェイトがメインヒロインとして登場します。

これから変わっていくかもしれない主人公の人生。みなさま、どうか暖かく見守ってください。

では、また次回お会いしましょう！

な「次回予告で一言もしゃべらせてもらえなかった…」

フ「酷いよ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7236v/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～違う未来の世界線～

2011年10月9日12時27分発行